

メアリー・バーネット

ジェイムズ・ホッグ作 江口之隆訳

— “Mary Burnet” by James Hogg

セント・メアリー湖から百マイルは離れていないとある羊飼いの家にて、これから語る事件が起きた。関係者の子孫がいまだ近辺に居住している以上、個人名を公表することは差し控えたい。もつとも見る人が見ればそれとわかるのだが。

ジョン・アランソンはインヴァロンの農家のせがれ、見た目はよいが浮気者、やや軽率、早い話が恋多き青年であった。情熱的で冒険好き、雨が降ろうが槍が降ろうが、鬼が出ようが蛇が出ようが身じろぎもせぬとの評判で、あれこれ色恋沙汰をやらかした果てに、カークスタイルのメアリー・バーネットに言い寄った。この娘はいかにも無垢な心の器量よし、田舎の純朴そのままに育った乙女であった。娘も男を気に入った。しかし男を恐れてもいた。みんなと一緒に会う分にはいいが、ひとりきりで男に会おうとはしなかった。もちろん男はぜひ会ってくれと懇願してくる。そして某日、聖母教会のミサのあと、男はここぞとばかりに隙を見て娘を口説いた。そしてついにメアリーも心を動かされ、“たぶん”会うと約束してしまった。

逢引の舞台は湖のほとりにある奥まった緑の木陰である。多くの釣り師と、かくいう筆者もよく知る場所だ。そして約束の時刻は「王の物差し」（いまでは無粋にもオリオンの腰帯と呼ばれる）の最初の目盛りが山の端に触れたときとなっていた。アランソンは早く着きすぎた。そこでやきもきしながら夜空を眺め、南東のすべての星が「物差し」の先端に見えていた。ついに物差しが姿をあらわしたとき、若者はメアリー・バーネットが駆け下ってくるはずのヒース茂る坂道を眺めるしかなかった。メアリー・バーネットは姿をあらわさず、そのあいだに王の物差しは山の端から五つ六つ分も空に昇ってしまった。

若きアランソンの心は絶望の底に沈んだ。そして物語の伝えるところ、心のなかで不浄にして邪なる願いを掛けた―魔女でも妖精でもよいから、メアリー・バーネットに術をかけて無理やりにもわがもとに連れてきたれ、と。この願いは報われぬ恋の恨みとともに三度唱えられた。三度唱えると、なんとしたとか、当のメアリーがなんとも奇妙な姿勢で山の斜面を駆け下りてくるではないか。アランソンは興奮を押さえきれず、喜びでいっぱいになった。のちに告白したところによれば、このときはあまり覚えていないという。メアリーはただ一言も発さず、口を閉ざしたままだったと語っている。ほどなく彼女は座りこんで啜り泣き、いかなる慰めも受け付けなかった。それから鋭い悲鳴をあげ、立ち上がり、男のもとから驚くほどの早さで逃げ去ろうとした。

先に述べたように、筆者はこの湖をよく知っている。岸边はどこも垂直の断崖となっており、大した高さではないが上からも下からも近づけない造作である。よほどの風が吹かないかぎり、水面は崖の下から一ヤードあたりのところにあり、中間の場所は上から落ちてきた不揃いな岩で埋まっている。昼間の釣り師でも通れないこの狭いごつごつした場所を、闇のなかのメアリーは仔山羊のすばやさで

駆け抜けていった。彼女の恋人があらんかぎりの声で叫んだ。「メアリー！　メアリー！　いとしのメアリー、待つてくれ。話を聞いておくれ！　家まで送つてあげるから。どこでも送つてあげるから、とにかく逃げないでくれ。お願いだから、とまっておくれ、メアリー――止まれ！」

メアリーは止まろうとしなかった。走りつづけ、ついに湖に突き出た小さな岬にたどりついた。周囲にもはや道はなく、このままでは男につかまると思ったのか、さらに悲鳴をあげると湖に身を投げた。静かな湖面に鳴り響く水しぶきの音が、青年の耳には葬鐘に思われた。それまで愛に満たされていた心は、いま絶望に満たされた。メアリーは岸から少し離れた場所に浮かび、湖の最深部へと流れていく。ほどなく彼女は沈みはじめ、声ひとつあげることなく姿を消した。もちろんアランソンは帽子も靴も上着も脱ぎ、湖に飛び込んでいた。メアリーが消えたと思しき場所に泳ぎついたが、水面には波紋ひとつなく、末期を示す泡すら浮かんでこなかった。この土壇場で、生きるも死ぬも彼女とももにとばかり、アランソンは一息つくや水底へと潜っていった。ふたりの遺骸が湖畔に打ち上げられるさまを思い浮かべ、憂鬱な満足に浸つてもいた。しかし水は思ったよりずっと深く、若者は絶望のさなか、ふたたび水面に戻るしかなかった。半裸でずぶぬれのまま岸に上がり、足を引きずりつつ悲報とともにメアリーの実家に向かったのである。あたりはまったく静まりかえつていた。メアリーは老いた羊飼いの一人娘だった。ひっそりと眠る一家を無残な話で叩き起こすことになる。そう思うと若者は涙するしかなかった。しかし、起こさねばならない。若者は家の主人の寝台脇とおぼしき小窓に向かい、憂鬱な声で呼びかけたのであった。「アンドリュースさん、バーネットさん、起きてください」

「おや、なんじゃ。起きとるのか寝とるのか。こんな時間に老いぼれアンドリュース・バーネットに御

用とは何事じゃ？」

「起きてますか？」

「かみさんよ、わしは起きておるか？ 起きとるなら、外のごろつきにそう言っておくれ。わしが言っても信用しそうにないが、おまえさんの言葉なら通じるじゃろう」

「アンドリューさん、いつもの冗談はご勘弁ください。とても悲しいお知らせがあるんです。なんともひどい、心引き裂かれる話です。こんな話を真正直なお人の玄関先に持ち込みたくはなかったんですが」

「窓先じゃよ」と叫びつつアンドリュー老人は寝台から抜け出して扉口に向かった。「ほれ、どこのだれだか知らんが中にお入り。とりあえず話を聞こうじゃないか。事の真偽はそれからじゃ。声の調子から察するに、かなり深刻な様子じゃの。牛泥棒でも出て、全部連れていったのか？」

「いや、もつと悪い話です——千倍も悪い知らせです。お嬢さんが——おたくのお嬢さんのメアリーが——」

「メアリーがどうした？」と老人は叫んだ。「メアリーがどうしたの？」と母親も恐怖に震えつつ、なお蠟燭に火を点しながら叫んだ。

よく見れば隣人のアランソンが、半裸ずぶぬれの姿で半狂乱の態である。その模様を見ると老夫婦も怖気づいた。ただ一言も発することなく見つめていると、若者が言葉をついだ。「メアリーが逝ってしまったんです。今頃お嬢さんは冷たい水の底で眠っているでしょう。それも、みんなぼくのせいなんです！」

「気が狂ったか、ジョン・アランソン」と老人が怒鳴った。「いや、狂っていてほしいわ。お前さ

んの悪さは耳にしとるが、わしらの娘を手にかけるほどの人でなしではなからうよ。そうさ、お前さんは狂つとるわ―顔色や仕草でわかる。神かけて狂つとる。なにがあるうとも狂つとるわ。なに、そのうち直るわさ。しかし、わしらはどうすればよい？」素晴らしいいつも気を取り直し、こう続けた。

「この目で確かめればよいんじゃない。かみさんよ、わしらを娘の寝室へ案内せい」

恐怖と驚愕に慄きつつ、老妻ジーン・リントンはメアリーの寝室へと向かった。後ろから男が二人、老女の肩越しに広がる闇をじつと凝視しながらのこのこついてくる。メアリーの小さな部屋は細長い小屋の一番奥にあつた。部屋に入るや、寝台の上になにかいるのがわかつた。布団を頭からかぶつてゐる。寝台脇の小さな箆筒には、いつものように衣服がきちんと畳んで置いてあつた。この様子を見て老夫婦の顔に希望の色が浮かんだ。しかし青年の心はさらなる絶望に沈んだ。父親が名前を呼んだが、寝台上のそれは返事をしなかつた。ただすすり泣く声が聞こえてきた。そこで老人は布団を引き剥がした。なんとも不思議なことに、メアリー・バーネットが横たわつていた。涙にくれていて、しかも寝巻き姿の三人の登場にまつたく驚いていない様子なのだ。アランソンは息を飲んだ。いまだ信じられなかつたのだ。かれはメアリーの衣服に触つてみた。一枚一枚、指で確かめたが、どれもまつたく乾いていて、清潔で、およそ湖に沈んでいた形跡などなかつた。

アランソンはわが身にふりかかつた怪事のために混乱してしまつた。悪夢のなかでもがいているか、なにか人知の及ばぬ力に翻弄されている気分だつた。それでもメアリーがともかくも無事だという事実は、喜びをもたらすものであつた。若者は泣きじゃくるメアリーの寝台脇でひざをつき、彼女の手にキスをしようと試みた。しかし彼女はけがらわしいとばかりに男の手をはねつけ、強い口調で言い放つたのである。「あなたは悪い人だわ、ジョン・アランソン。お願いだからわたしのまえから消え

てちようだい。今宵、わたしの身にふりかかった苦難は、人の血肉には到底耐えられぬほどのものだった。あなたが放った呪いの手先がわたしに苦痛をもたらしたのよ。あなたは大きいなるお方の法を冒したのだから、そのお方の御名にかけてお願いするわ。消えて」

希望と絶望が交錯するさなか、自然の作用にも天の摂理にも反する状況に直面し、若者はただ石像の如く立ち尽くすしかなかった。メアリーの手をとろうとした姿勢のまま、死人のような顔色となった青年は、老夫婦によつて部屋から連れ出されてしまった。夫婦はそれから火をおこして青年の衣服を乾かしてやり、おもむろに尋問を開始した。この一件について、知りたいことがそれはたくさんあったからだ。しかし青年の供述から得られるものは少なかった。ただ断続的な絶叫のみが鳴り響いたのだ――「ああ神様、いたいどういことなんだ？」とか、「みんな悪魔の魔法なんだ、悪霊がおれに取り憑いたんだ！」とか。

これではらちがあかぬと見た老夫婦は、自分たちでそれなりの推理をはじめた。おそらく湖のメアメイドがメアリーの姿で若者にちかづき、破壊させようと企んだのだ、とジーンが断言した。しかしアンドリュー・バーネットは、帽子をかぶりなおし、左手を掲げ、まさにこれから英知の言葉を吐かんとばかりの姿勢をとり、当然ながら叡智の言葉を語るのであった。

「かみさんよ、わしが思うにおまえさんは的を大きく外しとるよ。これだけの悪さをやらかすのはただのメアメイドではない。もつと位の高い精霊じゃろう。メアメイドは精霊ではないんじや。悪意を持った敏感なけだものというところか。そうじゃろう、鮭の尻尾をつけた魚もどきが、わしらの娘の幸せを左右するなどありえぬわ。だいたいメアメイドがどこで娘の服を手に入れるんじや？　なあ、ジーン、そうじゃろう？　あの若造をたぶらかしたのは妖精じゃよ。まずまちがいない。たちのいい

やつか、悪いやつか、そこまではわからんがの」

アンドリュウの詮索は若者の突然の発作によって打ち切られた。それは見るもおぞましい痙攣を伴うもので、いかにも生命にかかりそうな様子だった。ジーンは氣付け薬を取りに走った。(ろくでなしだが人間にはちがいないし、生きて改悛することもあるだろう)と考えていたのだ。ともかくも純粹なる人類愛の発露といおうか、老妻は強いウイスキーを大スプーン二杯、若者に嚙下させたのである。それからアンドリュウは両の首に赤い糸を結び、握り太のナナカマドの杖を手にすると、怯えて震える客人を家まで送り、別れ際に賢明な忠告を授けたのであった。

「ひとこといっておこう、ジョック・アランソン。おまえさんは身の破滅の一步手前まで行つたが、今日のところは運良く逃げられた。じゃが老人の忠告を聞くがよい。夜にふらふら出歩いて、堅気の娘にちよつかいだすような真似は二度とするな。この次はどんなひどいことになるかわからんぞ」

翌朝メアリーはいつも以上にきちんとした服装をしていたが、愛らしい顔には深い憂鬱が刻まれており、不意に涙があふれること一度や二度ではなかった。午前中まるまる、良いも悪いも一言もしゃべらなかつたという。母親の顔を憂鬱そうにじつと凝視していたことが数回あつたらしい。午前九時頃、干草熊手を担いで湖の東にある牧場に行き、正午まで親兄弟とともに干草を集めてから帰宅した。アンドリュウ老人が帰宅するや、当然の如く老妻相手に前夜に関する話し合いが始まつた。そして会話の最中にアンドリュウが言つたのだ。「やれやれ、ジーン、夕べメアリーがアランソンに放つた言葉は、あれはちよつとひどかつたかもしれんなあ」

「そりやまあ肘鉄ですからねえ、それでもちやんとしたクリスマスチャンの娘らしい言葉遣いでしたよ」
「はたしてそうかな、ジーン・リントン。かみさんよ、はたしてそうだろうか。あの言葉がどうも

心にひつかかってならんのじゃ。どういったらいいのか、ようするに、あの色男を追い払ったのは、神の御名においてだったのか、悪魔の名前においてだったのか」

「あれまあ、アンドリュー、なんでそういうことをおっしゃいますか。神の御名によってに決まっておりますようが」

「絶対にそうだとも言い切れんのじゃないか？ そう考えるほうが自然なんじゃろうが。しかしあの娘はこう言っただんじゃ。『あなたは大きいなるお方の法を冒したのだから、そのお方の御名にかけてお願いするわ。消えて』とな。正直いって、あの台詞のことを考えるのが恐ろしい。またあの娘はこゝも言わなかったか、『今宵、わたしの身にふりかかった苦難は、人の血肉には到底耐えられぬほどのものだった』と。あの娘は人の血肉ではないのか。まるで自分がただの血肉ではないと言っているようなものじゃないか。ジーン・リントン、ジーン・リントン、さてどうしよう。うちの娘は実は湖で溺死していて、昨晚以来あそこにいるのは妖精だったりしたら？」

「やめてくださいいな、アンドリュー・バーネット。心が凍るような話ですよ。これまで通り、神様を信じましょうよ、神様はいつでもわたしたちを見守ってくださいさるんだから。決してわたしたちを悪魔の手に引渡したりはなさりますまい」

「そうよなあ、ジーン、なるだけよいほうに考えようか」とアンドリュー老人。それから息子のアレクサンダーとともに牧場のメアリーの手伝いに向かった。

ヒースの丘を越えて牧場が見える地点につくと、アンドリューは息子に言った。「ジョック・アラソンがまたよからぬ釣りに出るのでなければよいが。うちのメアリーはるくに牧場仕事をしとらんではないか」

「あいつめ、仕事をほっぽりだして、なにか別のことをやってたな」とアレクサンダー。「あいつめ、天罰くらっても不思議じゃないぞ」

アンドリューは深いため息をついた。生命の根源を揺るがすようなため息だった。そして一言もなく牧場へと向かった。メアリーが家を出てからすでに三時間が経過している。少なくとも一時間あたり十二個の干草山をこしらえていなければならぬ。しかし、あるべき場所には七つの山しかなく、最後のひとつは未完成のままだった。MBと取っ手に刻印があるメアリーの干草熊手が最後の山にたてかけてあり、肝心のメアリーはどこにも見当たらなかった。妹がふざけて隠れていると思った兄は、あちこちの干草山をさがしまわり、いろんな悪口で呼びかけていた。すべての山を探し終え、さらに脇にある深い草むらもさぐったのだが、メアリーはいなかった。この若者はいつも牛舎で寝ているので前夜の騒ぎをまったく知らなかったし、老夫婦とアランソンは一件を秘密にすると約束していた。ゆえにメアリーの兄は、その父親ほど真剣に心配する理由を持ち合わせていなかった。父子で干草作業に取り掛かったのだが、父親のほうはまったく仕事が手につかなかった。あちこち見回したが、メアリーがやってくる気配もない。結局コートに袖を通して帰宅するしかなかった。とりあえず妻に悲しい話を告げる一方、息子には近隣の農家を回らせ、メアリーを見た者がいないか確かめさせようと決意した。

愛娘がいなくなったという悲報をもたらすと、老夫婦の驚愕と悲しみはとどまるところを知らなかった。ただただ泣き崩れ、座り込み、神様のなさりようはわたしら風情にはあまりにむつかしゅうございませと口にするばかりだった。ジーンは夫に、いまここでひざまづいて娘が戻るよう熱心に祈りましよう泣いて頼んだが、夫は首を横に振った。いまはジョン・アランソンへの怒りで胸がいっぱ

いで、とうてい神の御前に出られるような心持ちではないという理由だった。「あの放蕩者が心痛めた親の願いを聞かぬというのなら、心痛めた父親の腕の重みを思い知らせてやろう」

アンドリューはただちにインヴァローンに向かったが、アランソンが自宅にいるとはこれっぽっちも思っていなかった。ところが目的地についてみると、当の若者は熱病を患って寝込んでおり、魔法だ妖精だメアリー・バーネットだとうわごとを繰り返している。アンドリューが到着したときは、まさにこの発作の最中であり、あばれるアランソンを男三人でようやく押さえこんでいるところだった。先方の両親の見解はあっさりしたもので、息子は魔法にかけられたか悪魔に取り憑かれたかのだろうと言っていた。一家全員が大混乱していた。人のよい老羊飼いは、すでに悲しみがあふれている様子を見て取ると、一件を胸に収め、なんの慰めも得られぬまま、一人減ってそれはさびしい自宅へと帰っていった。

息子のアレクサンダーも手ぶらで帰ってきた。妹を見た人はだれもいなかった。ただ一人、頭がおかしい老婆がオクスクルーチという場所で見たと言っていた。ジョック・アランソンと一緒に、豪華なチャリオット型の馬車に乗っていたという。パークヒル街道に向かっていたから、今頃はダムグリ―・クロスあたりではないかとのこと。そもそもこの国にはチャリオットなどという乗り物は存在しないし、そのための道もないのだから、どんなチャリオットだったのかと老婆に質問してみたという。しかし老婆の返答ときたら、いやおまえさんのほうが間違っている、ときどきチャリオットがその方向へ大勢で通過していく、ただし一台も戻ってきたことはない、と。どうにも老婆のたわごととしか思えないので気にしないことにしたという。しかしメアリーの手がかりがまったく得られないので、

アンドリュー老人はこの頭のおかしい老婆のもとにも行ってみた。だが、老婆のほうは一件をまったく覚えていなかった。なにやらたとえ話ばかりしゃべり、まったくわけがわからなかった。

かわいいメアリー・バーネットは行方不明となった。九月十七日水曜日午前九時、白い袖なし上着に緑のボンネットをかぶり、干草熊手を担いで自宅を出た姿が最後に目撃されている。その朝の立ち振る舞いから察するに、なにかを予感していた様子もあったという。カークスタイルのメアリー・バーネットは行方不明となり、この謎の事件に国中は騒然となった。セント・メアリー教会の牧師の作とされる一連のバラードにこの悲劇を詠ったものがあるというが、筆者も話を聞いただけで、実際に朗詠されたかどうかは知らない。この手のバラードはこんなふうにしめくくられている。

「されど二度と戻らぬ／かわいいメアリー・バーネット」

すぐにこの話は国中に広まった。もちろん、おぞましい悲劇として無残なほど強調されてもいた。結果として、生き残ったアランソンはありとあらゆる悪口雑言を浴びせられた。ある程度、そうなくてもしかたのない面はあったのだ。なにせこの男はこのち、悔い改めるどころかささらに十倍も悪党になっていったからである。ある一点において国中の見解は一致していた。すなわち湖で溺死した方

が本物のメアリー・バーネットであり、寝台上ですすり泣き、翌朝消えた方は妖精ないし悪霊であつたのだ。いわゆる取替え子というやつだ。その証拠に、そいつはたった一回不思議なことを口走つただけだし、家族と食事ともにしなかつたというではないか。両親は途方にくれていた。ただ夢遊病患者のようにつらい世間を右往左往するだけだつた。メアリー・バーネットの身の回りの品はすべて両親の手で聖遺物の如く保管され、老いた母親の涙がとめどなく降り注がれた。残された衣服を見れば、それを着こなしていた持ち主を思い出した。アンドリューはしばしばこう語つた。「年若いてから子供を失うのはなんであれ大変なつらさだが、こんな形で失うのは人の身に耐えられるようになつらさじゃない」。

アンドリューはなんども湖のほとりをおるきまわり、衣服のきれはしでも残つてないかとさがした。なにか見えるたびに怯えていたが、それでも搜索は続けられた。岸辺に打ち上げられた小さな骨を集めもしてみた。それは羊などの動物の骨であり、ときに魚の骨も混じつていた。もしかしたらメアリーの遺骨ではないかと思つていたので。それを小さな袋に入れてとつておいた。「学者の先生に鑑定してもらおう」ため、と本人は言つていた。しかしそれ以外にメアリーの遺骸とおぼしきものはまったく見つからなかつた。

アランソン青年は熱病から回復したが、その回復法も尋常ではなかつた。数日間うなされたあと、突然よくなつたのだ。もはやメアリー・バーネットのことなど微塵も記憶していないようだつた。以前より十倍もたちが悪くなり、よからぬ目的を達するのに手段を選ばなくなつた。周辺の羊飼いたちも住民も、アランソンを毛嫌いした。家にあつても野良にあつても、神以外に聞く耳のないところだ

は、誰もがアランソンの毒牙にかからぬように祈りをささげた。まるでアランソンが悪魔そのものの如き雰囲気であった。そして誰もが、あれはろくな死に方をすまいと予言していた。

メアリー・バーネットが行方不明になった翌々年。そろそろ日が短くなり、夜が長く暗くなり始める十月半ばの金曜日。すなわち妖精年暦における記念日に、インヴァロンの若者ジョン・アランソンはアナンデールのモファットと呼ばれる村に出かけていった。ここでは盛大な口入れ市場が開かれており、女中を雇おうと思ったのだ。アランソンの悪評は知れ渡っており、地域の娘は誰一人としてアランソン家で奉公しようとはしなかったのだ。そこで遠くモファットまで出向き、できるだけ可愛く美しい娘を雇い、連れて帰ったその日にいたずらしようと企んでいた。これは仮定に基づいた告発ではない。アランソンはその意図を同行者であったカリフェランのデヴィッド・ウエルチ氏に打ち明けており、自慢げかつ楽しげに語っていたという。しかしこの日、この市場では、アナンデールの乙女たちを守護する天使が待ち構えており、もちろんアランソンもウエルチもそのことを知らなかったのである。

アランソンは口入れ市場を見回し、見回し、ついに一人の女性に目をつけた。実際、それほどむつかしい作業ではなかった。優雅さと美しきで並ぶもののない娘だったからだ。ウエルチ氏が立ち止まり、アランソンに目配せした。アランソンは美女の手をとって脇のほうに連れていった。彼女は緑の服を着ており、咲きたての薔薇のように美しかった。

「お嬢さん、仕事の口をおさがしか？」

「さようでございます」

「うちで働く気はないかい？」

「そうしてもよろしゅうございます。しかしそちらさまにうかがうとなれば、それはながくなりましよう」

「結構だ。長いほうがあるがたい。賃金はどれくらい欲しい？」

「賃金はある支払い方法を望んでおります。インヴァローンにて初めて目にする生き物を頂戴いたしますよう」

「それはおれのことになるのかな。ところで、インヴァローンについてなにを知ってる？」

「それは存じております」

「おやおや、よく見れば見知った顔だった。だが名前を失念してしまった。よろしかったら教えてくれるかな」

「しっ」と娘は厳かな口調でいい、口に手を当てた。「この場ではなにもおっしゃらぬほうがよろしいかと」

「こりゃ驚いた」とアランソン。「どういうことだ？ 名前を言うんだよ！」

「メアリー・バーネットでございます」と娘は言い、その美貌を緑のヴェイルの陰に隠した。

たとえこの場で死刑宣告がなされたとしても、アランソンはここまで呆然と立ち尽くすことはなかったであろう。顔色は死人の如くなり、顎はだらんとたれさがり、目は一点を見つめたままなら反応を示さなかった。様子をずっと見守っていたウェルチ氏は、相棒がなにやら手こずっていると感づいて、近くにやってきた。「アランソンさん？ アランソンさん？ どうしたんですか」とウェルチ

氏。「おや、あの娘に魅入られましたか。まるで銅像のようになってる！」

アランソンはなんとかしゃべろうとして喉のあたりで少し音を發した。しかし舌がいうことをきかずに、ろれつが回らなかつた。なんらかの發作か、あるいは失神寸前と見てとつたウエルチ氏が、相棒に肩を貸してどうにか居酒屋のジョンストン・アームズに連れ込んだ。しかしアランソンは事情を説明できなかったし、説明する気もなかつた。ウエルチ氏は、ともあれ緑衣の娘にもう一度会つてやれと思ひ、酒をふるまいアランソンを説得し、もう一度口入れ市場へと足を向けさせた。娘は名前を打ち明けた瞬間、人込みにまぎれて消えていた。ウエルチ氏も目を光らせていたのだが、娘の消えた方向すら判別しなかつた。アランソンは一種の恐慌かつ放心の状態にあつたが、娘が市場を去つたと知るとなんとか氣をとりなおし、ふたたびとびきりの美女をさがしはじめた。

すぐにかれは先般の娘よりもっと美しい娘を見つけた。まるでシルフのような乙女で、緑の縁取りのある雪白のローブをまとつていた。さつそくウエルチ氏に新たな花の所在を指摘する。ウエルチ氏も、あれほど完璧に美しい娘は生まれてこのかた見たことがないと請合つた。これは賃金をいくらはずもうとも手に入れねばと決意したアランソン、娘をわきに呼んでいつもの質問から切り出した。

「お嬢さん、仕事の口をおさがしか？」

「さようでございます」

「うちで働く気はないか？」

「そうしてもよろしゅうございます」

「なら、賃金はどのくらいほしい？ 調べてみたまえ。妥当な額をいいなさい。つまらないことできみを手放したくはないと思つてゐるんだから」

「賃金とはある支払い方法を望んでおります。ところで、インヴァロンのみなさまはお元気でらっしゃいますか？」

アランソンの息がつまった。全身に冷いものが這い回っているようだった。彼はくちごもりつつようやく答えた。「ああ—いつもどおりだ」

「そしてお年を召したお隣さんたちは」と娘が言葉をついだ、「みなさま、お達者でしょうか？」

「ああ、そう、そう思う」とあえぎつつ答える。「しかし、こうもご心配いただけるとは、いったいどちらさまでしたかな？」

「まあ」と娘、「カークスタイルのメアリー・バーネットをもうお忘れですか？」

アランソンは心臓を射抜かれたようにぎくりとした。美しいシルフのような姿が人ごみに消えていった。残された放蕩者はふたたび石像のように立ち尽くし、ふたたびウエルチ氏の手で介抱された。その後三人目にも声をかけてみたが、同じ答え、同じ名前が返ってきた。実際のところ、筆者がはじめてこの物語を知ったときは、七回試みて七回ともカークスタイルのメアリー・バーネットに出会ったという話だった。しかし筆者としては、アランソンがそこまで回数を重ねたとは思えない。数回くらえば、これは魔法にかけられたと悟るに決まっているからだ。かくして打つ手もないままアランソンが飲酒に逃げ道を見出しているとき、それは素晴らしい代物が市場に乗りつけてきて、その場の全員が目釘付けとなった。金箔仕上げのチャリオットに乗った、それは美しい貴婦人が登場したのだ。馬車の前後に金緑の制服に身を包んだ四人の家来を引き連れている。かくも豪華な一行がモファット市場に降臨されたなど、まったく前例のないことだった。たちまち市場中に話が広がり、当の貴婦人がモートン伯爵の長女レディー・エリザベス・ダグラスであると伝わってきた。モファット近郊のオ

ーチンカーズに滞在中の、スコットランドきつての美貌をうたわれた姫様だという。このお方はのちにレディー・キースとなられたと語られているため、ついでもながらもこの物語の時代が判明する。すなわちジェイムズ四世の御世であり、妖精やブラウニーや魔女がスコットランドにて隆盛を極めた時期であった。

市場のだれもがこの貴婦人をモートン伯爵の令嬢であると信じていた。そして令嬢が乗るチャリオットがジョンストン・アームズ亭に近づくと、帽子を脱いだ緑衣の紳士が出てきて、令嬢の手をとり馬車から外へと案内した。その比類なき美貌と壮麗に一同目を奪われたが、なかでもアランソンが圧倒されていた。天にも地にも妖精郷にも、これほど美しいものがあるうとは夢にも思わなかったのだ。ただうつとりと見とれていると、驚くべきことに、比類なき美貌の主はアランソンに目配せし、かれのもとに近づいてくるではないか！ これには周囲も驚いた。アランソンは頬をつねった。それから周囲を見回し、他人の反応を知ろうとした。しかし二度目の目配せがあり、にっこりと礼儀正しく微笑まれたので、アランソンはたちまち布製帽子をとって直立し、令嬢のもとに急いだ。すると是非もなく令嬢は腕を差し出し、二人は並んで居酒屋へと入っていったのである。

おれはスコットランドの名花レディー・エリザベス・ダグラスに気に入られた。アランソンはそう思い、また市場のだれもがそう思った。格別に目をかけてもらったあの若い農夫は何者かと大いに不思議がられた。アランソンはこの土地ではウェルチ氏以外に知り合いは一人もいなかったのだ。令嬢はまづかれの健康を質した。アランソンはあらんかぎりの礼儀を尽くして返答した。このあたりになると、ははあ令嬢はおれに気があるなど思い込んでいたので、まるで雲の上を歩むが如き心持ちになっていた。続いて令嬢は青年の両親について尋ねてきた。おやおやとかれは考えた。気に入られ

ようと必死なんだな。面倒な話題だが、すげなくするのめかわいそうだと、アランソンはできるかぎり丁寧な質問に答えた。そして令嬢の父君や弟君のロード・ウイリアムに話題を移そうとしたが、令嬢にさえぎられた。まだ私がわかりませんか、と訊かれたのだ。

「ああ、はい！」と彼は答えた。このレディーを知っている、この美しい顔には見覚えがある。だが、どこで会ったのか、正確な場所や日時は思い出せなかった。

続いて令嬢はカークスタイルの隣人に関して質問を發した。いまだ達者に行っているか、と。アランソンの心は氷と化した。全身に冷気が広がり、椅子のなかに崩れおちたまま、身じろぎもできなかった。しかし美しき佳人は優しい言葉で男を慰め、ようやくかれも口を開く勇氣を得た。

「今日いちにちじゅう、おれをもてあそぶとは。麗しき御身よ、あなたはなにものなんだ？」

「初恋の炎はたやすく消えずと申しますよ、ミスター・アランソン」と令嬢。「このなりを見れば私が幸運な日々を過ごしてきたとお思いになるかも知れませぬ。されどあなたへの初恋はいまだなにひとつ変わらぬままなのです。本日こうして姿を現し、あなたのところを少々試させていただいた件は、ささやかないたずらとしてお許しくださいませ」

「今日いちにちじゅう、あなたのみを美人と思つたことで、わたしの趣味のよさは少しは証明されたかもしれない」とアランソン。「しかしこうして今一度会えた以上、そうたやすくは別れたくない。わが残りの人生をあなたにささげたく思うが、ともあれどこにお住まいか教えていただかねば」

「すぐ近くです」と彼女。「ここからちよつと行つたところで、それはそれは幸せなところ。今晚にでもお招きできればよかつたのですが。主人が今、宅を離れて遠い国に出ておりますので」

「それはまったく問題にはならないと思う」と彼。

一応しぶしぶ認めるといふ形でアランソンの訪問は承諾された。信頼できる家来の一人を案内役として置いていくという話になったが、これはアランソンが固辞した。彼女の邸宅に出入りするさまをだれにも目撃されたくないという。あいかわらずわが道をいくお人ですね、それではお好きなようにと、間違えようのない道順を教えたのち、彼女はチャリオットに乗り込み、去っていった。

アランソンはのぼせあがり、あらゆる世俗の事物を忘却した。友人のデヴィッド・ウエルチを探し出し、この破格の幸運の件を打ち明けたが、かの女性がレディー・エリザベス・ダグラスではなかった事は黙っていた。ウエルチは同行すると言ってきたが、豪壮な居城に続く道の前までついてきた。そしてアランソンがなにを言おうとその場を動かさず、友人が星空の如く灯りを点した城門を通過するさまを見守っていた。

アランソンは、市場の最終日の翌朝には戻ると両親に約束していた。その日になっても翌日になっても戻ってこなかった。そして三日目、父親は白いポニーに乗って息子を探しにモファットにやってきた。父親は途上でカリフェランに立ち寄り、ウエルチ氏のもとを訪ねた。いまだアランソンが戻っていないことを知り、ウエルチは少々驚いていた。そうはいつでも大丈夫ですよと父親に請け合い、そのまま帰ったほうがよいとまで進言した。それからしようがないとばかりに、実は息子さんがモートン伯爵のご令嬢と色恋沙汰になっていると打ち明けた。逢引の約束でお城に乗り込んでいったのである、その様子は自分が最後まで見届けた。ここまで長逗留となった以上、よほど歓待されているのだろう、と。

父親がそれでも落胆しているようなので、結局ウエルチ氏も同行するはめになった。なんだかんだいっても息子に最後に会ったのはウエルチであり、城門に入っていく姿を見届けたのもウエルチであ

ったからだ。モファットにつくや、宿屋のまえにつながれているアランソンの馬が目に入った。市場がおひらきになった夜に戻ってきたのだという。しかし持ち主はレディー・エリザベス・ダグラスと一緒にいるところを目撃されて以降、だれも姿を見たものはいない。老いた父親はウエルチ氏とともにオーチンカーズルに向かうことにした。しかし目的地に到着するずっと前から、ウエルチ氏は道が違うと言い張っていた。あの晩、息子さんが向かったのは別の方角だったから、このままでは会えるものにも会えないよ、と。しかし二人はお城にたどり着き、伯爵との面会を許された。伯爵は老人の話聞き、これは狂人ではないかと思し召したようである。ともあれ娘のエリザベス呼び出し、老人のせがれと会った云々の件をたずねてみた。――先の金曜の夜に逢引する約束の件や、あるいは城内に息子がかくまわれているとの話をぶつけてみたのだ。

令嬢は父親の話聞き、また打ちひしがれた老人の真剣な顔を見ると、どう返答すべきかわからず、ともあれ説明を求めた。しかしウエルチ氏が話をさえぎった。こちらのレディー・エリザベスは息子さんが約束を交わしたレディーではないとアランソン老人に断言したのだ。自分は件の女性の顔を見たし、決して見間違いない。また息子さんが向かった城はこちらのお城ではない、と。「ともかく私と一緒に来てください」とウエルチは続けた、「このあたりは不案内だが、問題の場所にはお連れできると思うから」

二人はふたたび旅立った。そしてウエルチ氏はアランソン青年と自分が歩んだ道筋をたどっていった。数マイル進むと、道が急に右に切れる場所に出た。「この道で正しいんですよ」とウエルチ。「ここで立ち止まりましてね。息子さんは私に帰れとおっしゃったんですが、私は断りました。そしてあそこの大木のところまで一緒に行きました。そこからちよつといくと豪華な城門があつて、そこに入

つていかれましたよ。あと三分も歩けばお城が見えるでしょう」

二人は大木の横を通過し、さらに開けた場所に出た。しかしウエルチ氏は言葉を失った。お城もなければ城門もなく、ただぼっかりと入り江があるだけだった。おそらく五十尋はあろうかという深淵が広がり、黒い流れが逆巻いていた。

「どういうことだ？」とアランソン老人が言った。「お城どころか、ここは人の住む場所ではないわ！」。ウエルチ氏は茫然自失の体であった。石像のごとく立ち尽くし、変わり果てた景色を眺めるだけだった。ようやく口を開いたとき、「ご子息のご様子は、人の霊とこの地と空に住むすべての霊をつくりたまいし神のみぞご存知でしょう。わたしたちは魔法の世界にたださまようのみ。人の手に負えぬなものかに操られておるのでしよう。私は確かにご子息とこの場にて別れました。そして、そう、あの方角に、あの入り江の上というか、その上の空のあたりというか、そこに城門があつて、ご子息は入つていかれました。それはすばらしい城門でしたよ。これはもはや人知のおよばぬ領域なのか？」

二人は崖つぶちまで行つてみた。ウエルチ氏が先にたち、まさに城門が開いた場所にまでたどりつくと、馬がぎりぎり踏ん張つたと思しき蹄の跡を発見した。そしてずつと下のほう、はるか眼下の水中にぐちゃぐちゃになつたジョン・アランソンの死骸があつた。かくして邪悪なる放蕩者の生涯に実に不可思議な終止符が打たれたのである。この童話からいかなる麗しき教訓が引き出せるというのであろうか！

しかしこの顛末を最後まで聞いたとて、メアリー・バーネットの消息はわからずじまいではないか。そう思われる読者もおいでだろう。モファットに現れたメアリーはまったくの幽霊か幻影と思われるからだ。読者諸兄よ、実のところ筆者はこの乙女の運命を最後まで語ることはできない。昔話にはいろいろと伝わっているが、これからお話する部分は、これまでより十倍以上も謎と神秘に包まれているように思われる。

メアリーが行方不明になった日は、老齡の両親によって哀悼の日と定められ、悲しみと断食と悔悛に明け暮れることが決まりとなっていた。七年の月日が過ぎ去り、七回目の断食と祈りの日が近づいてきた。その前夜、アンドリュー老人はやはり湖の砂浜を歩きまわり、愛するメアリーの遺品が打ち上げられていないか探していた。すると縮んだような老人が自分のほうに急いでやってくるではなか。そいつは身長が手のひら五つ分ばかりで、どうにか人間の顔に見える程度の容貌の持ち主だった。それでも物腰はおだやかで、口調もまともだった。それはアンドリューの今晚はと挨拶し、なにを探しているのかと尋ねてきた。アンドリューは、決して見つからないものを探していると答えた。

「ところでお名前はなんとおっしゃる、年老いた羊飼いの」とそれが言った、「どうもわたしはあなたに用があるように思えます」

「おや！　なんでわしの名前を聞きなさる？」とアンドリュー、「わしの名前などだれの役にも立ちますまい」

「美しいお嬢さんがおいでではなかったですか、メアリーというお名前の？」と見知らぬそれが言った。

「つらいことをお聞きなさるの、おまえさん」とアンドリュー、「しかし確かにメアリーという名前の愛する娘がおりましたわ」

「その娘さんはどうなさいました？」とそれ。

アンドリューは首を横に振り、背を向けると歩きはじめた。それは考えたくない話題だった。心が張り裂けそうになるからだ。湖の砂浜をとぼとぼ歩きつつ、かすんだ目で行過ぎる白い小石をひとつひとつ確かめていった。その前かがみの姿、歩き方、まなざし、顔つき、すべてに絶望が見てとれた。一步一步に希望なき無気力が漂っていた。突如現れた小柄な老人―ドワーフ―があとを追ひ、さとうような口調で話しはじめた。「ご老人、真の病か気の病か知らぬが、ともあれあなたは衰弱しているようだ」とドワーフ、「しかしそのままでは、理性の呼び声にも真の宗教にも耳を貸さずにいるしいと申せましょう。創造主のあたえたもう慈愛に満ちた懲らしめの手のうちにあつて、不平不満を述べる者は果たして人の子と呼べるでしょうか？」

「わたしも自分が正しいとは思っておりません」とアンドリューが振り返った。眼前の縮んだ説教者に少しばかり驚嘆の念を覚えたのだ。「しかし理性でも宗教でも克服できない感情もありますのじゃ。それに、人の親なら抑えようのない感情も」

「その立場は否定させていただきましよう」とドワーフ。「絶対も相対もありません。至高者の下にあつて不満を述べる者は不正義に彩られておりましよう。とはいえ、細かい話は抜きにして、お尋ねします。あなたのお嬢さんはどうなさつたのですか？」

「娘の魂を造られたお方、体を育まれた方にお聞きなされるがよい」とアンドリューがおごそかに答えた。「わたしはそのお方に娘を委ねてきた。ほんの子供の頃からじゃ。そのお方のみ娘のことをご存知じゃ。わたしにはわからない」

「お嬢さんを失われてからどのくらいになりますか？」

「明日で七年じゃ！」

「なるほど、よく覚えておいでだ。その間、ずっと嘆いておいでだったのですな？」

「そうじゃ。わたしは死ぬまで一人娘のことを嘆きつづけるじゃろう。年をとってから授かった、それはかわいい娘じゃった。おお、この世のものとは思えぬ警告者よ、あんたはわしのかわいい娘のことをなにか知っておるのか？ 知っておれば、そのあたりの女とはまるで違っていたことがわかるはずじゃ。わしのメアリーには素朴さと純粹さがあつた。誘惑に屈しやすい人の身ではなかなか得がたい資質だったのじゃ」

「もう一度会いたいですか？」とドワーフ。

アンドリューは振り返った。全身がひくひくと振るえ、無礼千万な小鬼をにらみつけた。「会いたいか、じゃと、この化け物が！」と思わず叫んだ。「もう一度会いたいか、そう言ったのか？」

「そう言いましたよ」とドワーフが言った。「さらにこう言いましょう。これに見覚えはありませんか、よく御覧なさい！」

アンドリューはドワーフが差し出した品を手にとった。そしてよく見た。それから縮んだ余所者を見て、またその品を見た。そしてついには泣き出した。大声で泣いたのだ。しかしそれは喜びの涙であり、泣き声には笑い声も混じっているかのようだった。アンドリューはその品に接吻しつつ、とき

れとぎれに言葉を放っていた。「そうだ、見覚えがある。まちがいない。見覚えがある！あのエドワード金貨だ。穴が三つあいている。メアリーの十八の誕生日にプレゼントしたやつじゃ。お祭りにそなえて新しい服を買うように、と。でもあの子は言った。よく覚えていて。とてもきれいで、さらにさらしてからの、お父様からのプレゼントとしてとっておきたい、と。おお、おお、おまえさまはありがたいお人じゃ。教えてください、あの子はどうしますか、どこにおりますか？生きておりますか、死んでおりますか？」

「生きておいでです。お元気ですよ」とドワーフ。「以前よりも美しく、強く、賢く、それは素敵におなりです。急げば明日の午後にモファットでお嬢さんとそのご家族にお会いになれますよ。ご一家は旅行でモファットに立ち寄られるのですが、急ぎの旅なのです。それでわたしはこの品を渡されて、あなたに事情を説明するよう言われてまいりました。どうか元気をふるいおこして、死ぬまえにもう一度お嬢さんに会って抱きしめてあげてください」

「ならば、モファットでメアリーと会えるのですな？　おお、小さな大恩人よ、わしと一緒に来てください。老羊飼いが精一杯のご馳走をしますぞ。あした、ともにモファットに向かってください。老妻とともに参りましょう。どうか、ありがたき伝令の御仁よ、一緒においでなされ」

「よき羊飼いや、わたしはそちらのお宅にお邪魔するわけにはまいりません」とドワーフ。「ご馳走もいただけません。すべてはのちの喜びのため、ご自分のためにとっておいてください。わたしが受けた命令は、この国にて飲み食いすることではなく、直ちに奥方様のもとに戻ることにあります。さればお急ぎください。もうあまり時間はないのです」

「それで、あの子は何時にまいりますか？」とあわてて家路につくアンドリューが肩掛けを振り捨

てつつ叫んだ。

「聖なる十字架の影がまさに真東に落ちるとき」とドワーフが叫び返した。そして振り向くところも消えていった。

夫が肩掛けも忘れてあたふたと帰宅し、ダブルの上着の胸元をはだけてなにやら叫んでいるので、これは発狂したなと老妻ジーン・リントンは思い込んだ。そこでなんとも心配になり、菜園のわきで夫を出迎えた。「あらまあ、正気に戻ってくださいな、アンドリュー・バーネット。いったいどうしたというんですか？」

「邪魔をするんじゃない、わからんのか、わしは急いどるんじゃない」

「それはわかりますけど、落ち着いてくださいな。なんでそんなに急ぎますか、おつむがおかしくなつたとか？」

「とんでもないよ、おまえ。わしは正気じゃ。モファットまで行こうというだけじゃ」

「あれまあ、どうしたというんです。どうしてモファットまで行けましょう。お忘れですか、あしたは大事な日じゃありませんか」

「どいとくれ。そしてもう大事な日などというんじゃない。明日までにモファットに着くんじゃ。おまえさんもモファットまで行くぞ。さあ、これをどう思う？ ほれ！ この金貨に見覚えがないとは言わさんぞ。あれの持ち物だったじゃろうが」

「アンドリュー、アンドリュー・バーネット！」

「怯えた顔をするんじゃない。ほれ、急げ。わしの一張羅をとってこい。おまえさんも晴れ着を忘れるんじゃないぞ。絹の帽子もかぶってこい。明日にはモファットに着くんじゃから。そんなびつと

りした顔をするんじゃない。明日、モファットでわしらのメアリーと会えるんじゃない」

「ああ、アンドリュウ、悪い冗談はいやですよ。あたしの気持ちを知っているでしょう」

「冗談などいふものか。からかうなどこれっぽっちもないわ」とアンドリュウが叫び、泣き崩れた。

「おまえさんの気持ちは神様の玉座から流れる息吹と同じくらい大事に思つとるよ。これは本当の話なんじゃ。わしらのかわいい娘が明日、モファットで会ってくれるんじゃない。息子を両手に抱えての。だからもう一度会いに行くんじゃない。死ぬまえに一度でいいから会つて、抱きしめて、祝福するんじゃない」

年老いた妻の目からも涙が泉のように湧き出し、悲しみに瘦せこけた頬を伝つて大地へと吸い込まれた。それから妻は夫の足元にひざまづき、スカートのすそで顔を覆い、創造主への感謝を吐露した。

それから喜びに打ち震えつつ立ち上がり、なにもかも忘れて路上へ、モファットへと走ろうとした。しかしアンドリュウが押しとどめ、二人は旅支度を整えはじめた。

カークスタイルはモファットから二十マイル離れている。九月十六日火曜日午後、老夫婦は旅立つた。その夜はターンベリーと呼ばれる場所に泊まり、翌朝正午にはモファットに入った。老夫婦には過酷な強行軍であった。二人は娘がやってくると思われる道を推測し、またどのような姿でやってくるかを話し合つた。「りようほうともわしの腹はきまつた」とアンドリュウ。「最初は東のほうから来ると思つたよ。わしらの祝福は常にその方角から現れるのだら。しかし東の道はわしらが来た道の近くで終わっているのだから、おそらく南から来るんじゃないろう。きっと息子の手を引いてくるじゃない。荷物を持たせた召使を引き連れて」

二人は南に向かういろいろな道を歩きまわり、メアリーに会うことを期待した。しかし最後は聖なる十字架の影が見える場所に戻ってきた。そして影が真東に落ちる頃になると、ただ道の真ん中に立

ち尽くし、あらゆる方角を見回すだけになった。ついにダムフライ・ロードの半マイルほど向こうから、二人の子供を連れ、哀れな乞食女がやってくるのがわかった。ちよつと離れたところからもう一人の乞食がついてくる。老夫婦の目は乞食たちに釘付けとなった。背後にいる乞食があのだワーフだとわかったからだ。そして他の俗世の事物はもはやかれらにとつて何の意味も持たなくなった。ただ近づいてくる乞食たちだけがすべてであった。そのとき、金箔仕上げのチャリオットが南のほうから村に乗り入れてきて、夫婦のそばを全速力で駆け抜けていった。前に二人、後ろに二人、緑と金の制服を着た家来たちが乗っていた。「ああ、もう！ けばけばしい虚飾じゃ！」と吐きすてるアンドリユー。豪華な乗り物は轟音を立てて通過していったが、老父も老母も一顧だにしなかった。ふたりの心は乞食の一团に集中していたのだ。「ああ、あれが娘か」とアンドリユーが言った。「あれがうちの娘か。どれほど貧しく打ちひしがれようと、物腰は昔のままじゃ。じゃが、どれほど貧しかろうが関係ないわ。娘もその子供たちも、わしの目の黒いうちは大歓迎じゃ。うちに連れてかえるんじゃ」

老夫婦は目を細めた。二人の心は慈愛と憐れみでいっぱいになった。アンドリユーはなにかが自分のひざに抱きついたのを感じた。目を落とすと、そこにはメアリーがいた。美しい花のように豪華な娘が足元にひざまづいていた。アンドリユーは悲鳴のような歓喜の声をあげ、娘をかき抱いた。そして年老いたジーン・リントンは震えながら立っていた。両腕を広げていたが、かくも美麗な人物のそばに近寄ってよいものか逡巡していた。やがて娘のほうから抱きついてきた。母は娘にすがりついて泣き崩れた。すばらしい出会いだった。――比類なき再会だった。老夫婦は長らく行方不明であったメアリーをまじまじと見た。抱擁し、本物と確信し、満ち足りた。満ち足りた、とは筆者の描写である。夫婦は多くの人よりもはるかに幸せになった。メアリーはチャリオットから飛び降りたばかりであつ

た。両親が立ち尽くしているのを見るや、駆け寄って足元にひざまづいたのだ。一同は宿屋に入った。メアリーは二人の息子を両親に会わせた。その晩はあらゆるご馳走がふるまわれた。そしてメアリーから両親に豪華な品々が贈られた。メアリーは真夜中まで両親を見守り、やがて二人が幸せな深い眠りに落ちたのを見てとると、ふたたびチャリオットに乗り込んで走り去った。その後スコットランドでメアリーを見た人の話など、筆者はまったく聞いたことがない。しかし両親は死ぬまで娘の幸福を確信し、喜んでいたという。

(終)